審査の結果の要旨

氏名　中村（冨田）知世

高校教師の行為に関する社会学的研究は、従来、法規制などの「外的要因規定モデル」や単一の学校組織内に限定された「教員文化モデル」に主に依拠してきたが、本論文では、Scott に代表される新制度派組織社会学の概念を援用して、教師の行為を形作る認知的枠組みが時間･空間を越えて影響を与える制度として存在するとする「文化－認知的制度モデル」に基づいた実証分析を行うことにより、教師の行為を理解する新たな説明図式を提供することを目的としている。

このモデルの検証に当たって、本論文では東北地方の地方公立進学高校において1990 年代以降に共通して見られるようになった「受験請負指導」の規範（生徒の大学受験の結果は、教師が一義的にその責任を請け負うべきであり、その成果評価は難関大学合格者数に反映される）に着目し、その認知的枠組みが確立し、次代の教師へと継承され、さらに他校にも空間的に普及していくことで、「地方公立進学高校制度」へと制度化されていく連続的な変容過程を、A 県の X・Y 高校における教師へのインタビューや文書資料などから丹念にあとづける。さらに 2000 年代後半に、それが脱制度化されていく過程が詳細に分析される。

本論文は、大きく第Ⅰ部の理論編と第Ⅱ部の分析編から構成される。まず序章で、1990 年代に汎化する受験請負指導の背景と、分析事例として取り上げる高校の概略などが示され、第 1 章において高校教師の行為を解釈するこれまでの理論と研究の課題を検討した上で、それを克服する概念モデル（「文化−認知的制度モデル」）を新制度派組織社会学から導出する。すなわち、教師の行為は時間的・空間的に持続する認知的枠組みである「制度」によって形作られるのであり、またそれは連続的な変容をたどるものと措定される。つづいて第 2 章では援用される分析概念、とくに（脱）制度化過程の諸段階（客観化、正当化、沈殿化など）とそれらに関与するアクター概念（支援的アクターや守護者など）が検討される。

これら第Ⅰ部の理論的検討と援用する概念装置の考察を経て、第Ⅱ部では実証的分析が積み重ねられる。まず第 4 章では 1990 年代の X 高校の受験請負指導の確立が解明される。とくに難関大学合格という成果による客観化、その増進に伴う成功感がもたらす正当化、さらには次代の教師への継承という沈殿化といった諸段階が綿密に検討される。続く第 5 章では X 高校から Y 高校への普及過程が分析され、それに重要な役割を果たした教師たちの分析から、「制度的移植者」という分析概念が抽出される。さらにそれらを受けて第 6 章では、受験請負指導が「地方公立進学高校制度」として制度化されたのち、様々な社会的圧力によって徐々に変容していく脱制度化の過程が考察される。終章ではこれらの知見を総括しつつ、教師の行為を理解する新たなモデルの意義が改めて考察される。

以上、本論文は、1990 年代以降の地方公立進学高校の受験指導に関する丹念な質的調査によって、新制度派組織社会学をミクロレベルに援用しながらもそれらを批判的に検証しつつ、その上で「制度的移植者」などのオリジナルな概念の提唱を行うなど、理論と実証の巧緻な往還を行うことに成功している。よって、本論文は博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと判断された。